特集 若きリーダー対談

【進行・『飛翔』編集部】

仙台をもっと良いまちに！共に連携していきましょう

納庄 国英（のうしょう・くにひで）氏　公益社団法人仙台青年会議所 理事長（株式会社ビルワーク 取締役副社長）

活動を通じて、大きく成長

進行　まず、団体の概要と活動の理念についてご紹介いただけますか。

納庄　私たちＪＣは、「明るい豊かな社会」を実現するために存在している団体です。地域をけん引するリーダーが多ければ多いほど、そのまちは豊かになると考え、「まちづくりは人づくり」という姿勢で活動してきました。現在、世界１１０の国と地域に約17万人のメンバーを擁しています。エリアをＡＢＣＤの４つに分けて、毎年エリア大会を開いていますが、２００２年、この仙台で日本が属するエリアＢの大会「ＪＣＩ ＡＳＰＡＣ」（国際青年会議所 アジア・太平洋エリア会議）を開催し、主管として多くの経験を積みました。今年はその大会が山形で開催され（６月２日～７日）、仙台ＪＣも副主管として全力でサポートさせていただいたところです。

遠藤　ＹＥＧは、あくまでも商工会議所の一部会的な役割を果たしており、商工会議所活動の一翼を担う存在として、各地の商工会議所に設置されています。従って、商工会議所が持つ地域の総合経済団体としての役割を果たしながら、独自の「自己研鑽」、「人脈づくり」、「地域貢献」という３本の柱を立てて活動しています。特に今年は、行政および地域との連携に力を入れていくつもりです。

　現在、ＹＥＧは全国に４０８単会、２万９千人を超えるメンバーがおります。地域ごとに東日本・中日本・西日本と３つに分けて、毎年全国大会を開催し、ネットワークの強化を図ってまいりました。昨年度は日本ＹＥＧのトップを仙台から輩出したこともあり、注目される機会の多い１年でした。トップとなった阿部賀寿男さん（㈱阿部蒲鉾店代表取締役社長）の活動をそばでサポートすることで、全国各地のＹＥＧ活動に触れることができ、私自身も仙台ＹＥＧを客観的に見つめる良い機会となりました。

進行　これまでの活動から、お二人はどんなことを得たと感じていますか。

納庄　仙台ＪＣが震災の支援のために立ち上がったのは、地震発生から２日目でした。当時は何もかもが混乱していましたから、まず行政ができない部分をフォローしようと、全国のＪＣメンバーから寄せられた物資をＪＣ独自のルートで配給しました。

未曾有の震災から3年半。復興に向けて懸命な経済活動が続く中、将来に向けて希望を持つことができる地域づくりのために、若手経済人がなすべきことには何があるのでしょうか。

今回は若手経済人が集まる二つの組織が取り組む活動について、仙台青年会議所（以下、仙台JC）と仙台商工会議所青年部（以下、仙台YEG）、それぞれのトップに、次代を担う人材の育成や、まちづくりにおけるさまざまな課題の解決に向けた考えや理想について語り合っていただきました。

YEG

仙台商工会議所青年部
平成14年発足／会員数:250人／事務局:022-265-8126

遠藤 雅範（えんどう・まさのり）氏

仙台商工会議所青年部 会長
（有限会社遠藤自動車塗装 取締役社長）

また震災から1年が経過した時、あの日を忘れないためにと、また希望ある未来へと進むためにと「キャンドルナイト」という事業を始めて、今年で3年目になります。今では復興の格差を感じる場面が多くなりましたが、復興を実感することができない人たちが希望を持ち、未来を描くことができる、そんな心の部分をきちっと手当てしていかなければならないという思いを改めて強くしています。JCの活動から得たことはという問いに対しては、あの時に助けていただいた、そして今もその思いを持ち続けてくださっている方々への「感謝」、そして私たちが使命を成し遂げるのに必要な「強い意志」と言えるのではないでしょうか。被災された方々に対して、思いを寄せて心を重ねることが、第一に必要ではないかと思っています。

遠藤　私の場合は、委員会や役員会に出席するうちに、仕事の面で悩んでいることについて話し合えたり、自分たちが仙台の経済をけん引し、また仙台をもっと良いまちにしていくんだという決意を聞いたりする中で、自分の意識が大きく変わっていきました。商工会議所とはどういった所なのか、行政とどんなつながりをもっているのかなど、実にさまざまなことを学びました。中でも大きな収穫は、経営者としての悩みを共有できる仲間に出会えたことです。また、個人では全くアプローチをする機会がなかった行政と接点を持ち、地域とのつながりについて、地域により貢献するための手法を考え、少しずつでも実行できるようになったことは、私としては大きな進歩だと思います。

3月11日 キャンドルナイトの様子（JC）

お互いに補完し合い、仙台をより良いまちに

納庄　YEGさんとJCは、活動の内容は異なっても、「この地域をより良くするために」という目的は共通しているんですよね。ただ、JCは地域の問題点を解決することが、明るい豊かな社会の実現へと繋がることを主たる目的として、積極的に取り組んでいる団体なので、「JCの中では仕事の話はあまりしない」という部分が若干あります。先日、JCを卒業した方が「現役の時にできなかったので、これから人脈を活用し、仕事の幅を拡大したい」といったことをおっしゃっていました。JCでも、そろそろビジネスの話をしても良いのではないかと言う人もいるのは確かです。自社の経営が安定していなければ、JC活動に

も身が入らないとも言えますからね。その点、YEGさんはメンバー同士だけでなく、東北大学などと連携しながら、新しいビジネスモデルを構築し、それを実際のビジネスに生かしている。私個人としては、実にうらやましいです。

遠藤　YEGは、あくまでも企業経営の勉強の場であり、「社業あってのYEG活動」という考え方なので、その点がJCさんと大きく異なる点でしょうね。東北大学との連携で事業化が実現したビジネスプランは、日本YEG主催のビジネスプランコンテストでグランプリ及び準グランプリに輝きました。手前味噌ですが、これらは実に良い内容の事業だと思っています。

納庄　私たちがお互いに得手ではない部分を補完し合うことで、さらにこのまちは良くなる。そうは思いませんか。

遠藤　もちろんです。JCさんは、これまで60年以上にわたって地域に貢献し、また地域づくりのリーダーを数多く輩出してこられました。その実績を見るにつけ、私たちも地域をけん引する人材を輩出する団体にならなければならないと思います。

行政と市民のパイプ役として

進行　震災から3年余りが経過したいま、真の復興を果たすために行っていること、また必要であると考えていることについて、お話しいただけますか。

納庄　私たちは震災があった2011年に「IMAGE 2021'S SENDAI」という、震災から10年を一つの区切りとして、震災以前よりもしあわせな仙台を実現していこうというフラッグを掲げました。今年は、そのフラッグのもとに具体的なビジョンを作成しているところです。

　幸せをイメージできる、希望を持つことができる地域になること。それが真の復興であると私たちは考えています。例えば自分の子どもが生まれて、初めて対面した時に何とも言えない幸福感に包まれる。それと同じような幸せが感じられることが仙台JCの役割だと思っています。今年で45回の開催となる「仙台七夕花火祭」も、実は花火を上げることが目的ではなく、市民が待ち望んでいる花火を上げることで、その時にそれぞれが感じたことが新たな気づきにつながり、ひいてはまちを愛する心につながっていくと信じ、私たちのメッセージを伝えるために上げているのです。そして、今年も準備を進めているところです。

遠藤　仙台YEGが今年、特に注目しているのが震災復興に対する行政の取り組みです。例えば仙台市では、4つの数値目標と9つの戦略プロジェクトによる「仙台経済成長デザイン」というものを取りまとめています。その中に起業家を育てる土壌を整備し、支援体制を整えることによって、仙台を起業率ナンバーワンの都市にすることを目指す項目があります。私たちは仙台の青年経済人として協力すべく、何か新しい事業を興そうと意気込んでいます。

　また、このまちに住む子どもたちには夢に向かって行動してほしいという思いから、毎年、子どもを対象とした事業を行っています。昨年の例では、七郷小学校にプロレス、バスケットボール、サッカー・フットサルのチームから4人のスポーツ選手に来ていただき、夢をかなえた選手の話を聞くという講義をディスカッション形式で展開しました。そのあと、選手の皆さんと一緒に各競技にふれる授業を行って、子どもたちはもとより、先生方にもとても喜んでいただいたんですよ。

　さらに今年で29回目を数える「杜の都キッズウォークラリー」という、仙台の歴史的な場所を親子で歩いて巡るイベントを開催しています。今年は初めてコースを変更し、中心商店街も歩いてもらいました。これからも子供たちの地元を愛する心を育てる活動を行っていきたいと思います。

6月1日 ウォークラリーの様子（YEG）

進行　では、納庄さんに伺いますが、「人づくり」の面で、子どもを対象とした事業のアイデアはお持ちですか。

納庄　現在、文科省が情操教育を通じた土曜授業の実施を推進しているんですが、全国のJCでもこの取り組みを行なっております。土曜授業に道徳教育を率先して取り入れたところ、それによって学力も向上したという調査結果も出ているんですよ。子供たちには、興味や能力を生かし、自分の夢をかなえるために学校があるのだということを、人との付き合い方や、日本人として世界に伝えていかなければならないことなどと共に

理解し、学ぶことは、グローバル化が進むこれからの社会を生きていく上では、より大切になってくるでしょう。また家庭や地域、学校が三位一体となって子どもと大人が共に学びながら育つコミュニティができあがっていくとより理想的な形になると思います。

遠藤　大人も参加するところがいいですね。私自身、子どもの頃は良くないことをすれば近所の大人が注意してくれる環境で育ちましたから、そういったコミュニティがなくなってきているのが問題だと思っていました。土曜授業、いいですね。ぜひその時は、運営の手伝いをさせてください。

納庄　ありがとうございます。私たちもＹＥＧさんも、行政と市民のパイプ役になるという役割がありますので、私たちがコーディネーターになることで、仙台でもこの土曜授業が実現できるのではないかと思っています。

地域を愛する気持を大切に

進行　最後に今後の抱負をお聞かせいただけますでしょうか。

納庄　今年の仙台ＪＣのスローガンは「Ｉｍａｇｅ ｏｆ Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ ＳＥＮＤＡＩ」～青年として、惑わず、憂えず、恐れず～です。幸せが満ちあふれる仙台をイメージすると、そこには地域との絆や家族への愛、そして子どもの笑顔が浮かび上がってきます。すべては自分のためではなく、人を想い、人を幸せにすること。よく考えてみると、幸せというものは実は自分一人では感じられないものなんですね。多くの人々と共に生きるからこそ、自分の幸せがある。今年度の仙台ＪＣは、そんな幸せな仙台をイメージして、未来に向けてさらに力強く、メンバー一人ひとりが「智・仁・勇」の理念をもって行動し、明るい豊かな社会の実現へ向けて運動を展開していこうと心を一つにしています。「惑わず、憂えず、恐れず」というのは、孔子の『論語』からひもといた言葉で、人としての三徳は「智・仁・勇」であると書かれています。智というのは、物事の道筋を立てる、要は学んだことをどうやって生かしていくか、その智恵をまず身につけましょうと。その智恵を実践に生かすとき、必ず他人を巻き込んでいかなければなりません。そこで相手の立場に立ち、思いやりを持ちましょうということで「仁」。そして、最後は勇気をもって決断する。これが「勇」です。失敗を恐れず、最初の一歩を踏み出すことが未来をつくる。こんなリーダーが仙台にたくさん生まれれば、幸せな仙台を実現することにつながるというメッセージを込めました。

具体的にどういうことかといいますと、今の仙台にはさまざまな課題があります。例えば人口は増えていても、交流人口は減っているとか、産業構造が震災前から少しずつ変化してきており、復興需要に対して恩恵を受けていない産業の人たちもたくさんいらっしゃるとか。ただ、未来に向けての仙台市の計画もいろいろと進んでいます。例えば地下鉄東西線の開業、そして来年3月には国連防災世界会議の開催が予定されています。交流人口の増加につなげるには、このような新しいプロジェクトに目を向けて、地元の人たちが仙台の良さを発信することが必要不可欠だと思うのです。ハード面では仙台空港の民営化が予定されていますが、仙台をまた訪れたくなる都市にするのは、そこに住む私たちが、仙台にどれほどの愛着を持っているかにかかっていると思うのです。仙台ＪＣでは、このまちを愛する人を増やし、同時に仙台の魅力をどんどん発信していこうと考えています。

遠藤　地域を愛する気持ちこそ、まちが未来に向かって前進する原動力になるという点でも、仙台ＪＣさんと私たちは同じ思いで活動しているんだということを、改めて認識しました。私たちの今年度のスローガンは「ＬＯＶＥ仙台～地域と共に前へ、前へ」で、思いを込めて行動する時には「興味がある」とか「好き」というレベルではだめで、あえて「ＬＯＶＥ」の言葉を掲げたのです。このような強い思いを持ちながら、今年度は特に、行政が目指すより良い地域づくりを我々も共に尽力していこうと思っています。実施が決まっている事業としては、仙台市の若手職員とのディスカッションを行い、中小企業が行わなければならないことを見出す機会にするつもりです。ＪＣさんもそうですが、うちには優秀なメンバーがたくさんおりますので、その力を生かすべく、仙台ＪＣと仙台ＹＥＧとの連携を、ぜひ実現したいですね。

納庄　お互いの強みを生かし、弱点を補完する形でのコラボレーションは、きっと仙台をより良いまちにするための大きな力になるでしょう。今後とも、よろしくお願いします。